

こんにちは。教育研究所という所の田澤と言います。よろしくお願いたします。弘前市の学校適応指導教室を担当しております。ただ、先程、豊島先生の方でほぼ総括的な部分がでてしまいましたので、私の方でお話しすることは何もないかと思いますが、あえて感謝の意味も込めながら、お話しさせていただきます。

弘前市内では、昨年度30日以上学校を休んだ不登校の子ども達が小学校の方で約35人、中学校の方ではそれがさらに増え、中学生の総数は小学生の総数の半分であるのに対し不登校の子どもは5倍近くあります。

適応指導教室には昨年度、約45名の子ども達が来ています。今年は今のところ20名の通級生があり、中学生がほとんどで小学生が1名います。毎日14~15名の子ども達が来ていろいろな活動をしています。そこで、7名の指導員の先生方が日常的に直接関わっております。今日も版画を一生懸命彫りながら適応支援をしております。

そこに大学の学生の皆さんが入って、お兄さん、お姉さんというような形で関わっていています。そのことが子ども達にとってはものすごく良い影響となっていると思います。私は2、3年前から関わっているのですが、毎年学生は素晴らしいと思って見えています。子ども達は、時として率直な表現が多い時もあるのですが、それをいつもにこにこ受けとめ、真剣に真正面から子どもの心と向き合う。毎年そのような学生達ばかりです。自分の学生の時と比べると、こんなに学生は真面目だったかなと思うくらい真面目なんですね。今年の学生さんもすごく熱心に取り組んでおります。それまでの大学での勉強が積み重なっている部分もあるかと思いますが。真面目に関わっていく中でどうしようかなとか、こんな関わり方で本当に良いのだろうかとか、そして私何をやっているんだろうかと本当に悩むことも多いと思います。真面目であればあるほど、悩むことは当たり前なのかもしれません。そして、実際に悩んでいるのではないかと思います。逆にそれが本当に大切なことなのだというふうに思いました。なぜかといいますと、そこからまた、それでは次にこれどうしようかというように真剣に考えていくことができるからです。その毎日の積み重ねによって、1年2年経った後に自分自身をしっかりと見つめなおすことができます。やはり、学生さんは立派だと思いました。

また、本当に感謝したいことは、子ども達が学生さんの一言一言、声をかけられたことによって今まで個室で黙っていた子も徐々に心がほぐれていき、皆と一緒に活動に移っていきたり、あるいは、自分の言葉で自分の考えを少しずつ出し始めるようになったことです。今年もまたそういう子ども達を何人も見ました。体験的活動を今年は6月と10月に行いました。6月は雨の中の十和田湖・奥入瀬散策、10月は板柳のふるさとセンターで炊事を兼ねた施設見学を行いました。そのような大きい活動をきっかけとして、さらに心の交流が深まり、子どもにどういうふうに向かえば良いのかということをしつくりとしっかりと見つめなおして考えていけたらと思っております。

まだ、半分しか今年度は経っておりませんが、この10月、11月は不登校の相談や通級を始めるといふ子ども達が増える時期でもあり、毎年そういう傾向になっています。今



までの通っている子ども達とは、また違った別の子ども達を迎え、その子たちを不登校ひとくくりでは絶対にくくれないということ、一人一人が全員違うんだということに関わっていく中で本当にわかるのです。そうすると、一人一人には常に同じ対応というのはいっさいありえません。それぞれの子のことを皆で考えながら対応していくことが必要になってきます。学生の皆さんにとっては貴重な非常に良い経験となるのではないかと思います。また、適応指導教室としても子ども達が少しずつ自分の心を解きほぐし、表に出していくことができ感謝しております。

そういうふうに関わりながら実際に適応指導教室に来ていただいている学生さんのみならず、今この場にいる他の学生さんもいずれまた教師として、あるいは将来親として一人一人の子どもに対し、不登校の子どもであるあらずにかかわらず、何かしらの悩みを抱えているだろうことを知っておいてほしい。そして、必死にそれを乗り越えようとして一生懸命生活しているということをしかりとらえてほしいと思います。また、それらの一つ一つに真剣に向き合える教師、さらには親でありたいと思います。したがって、学生の皆さんには今のうちに自分はどうしていけば良いのだろうかを、さらにいろいろな直接体験を数多く自分なりに重ねていく中で、考えを深め、自分の心を少しずつ耕していくことができるように、今後も頑張ってくださいと思います。以上です。